

# 大洲藩ゆかりの偉大な学者 中江藤樹の足跡

## 15歳で百石の跡継ぎに

大洲の歴史をひもとく上で、忘れてはならない人物がいる。江戸時代初期の儒学者・中江藤樹だ。慶長13年(1608)に近江国に生まれた藤樹は、9歳の時に、伯耆国米子領主加藤貞泰の家臣であった祖父の養子となる。その翌年の元和3年(1617)に加藤家が大洲に移封になり、祖父母とともに大洲へと移り住んだ。15歳で家禄百石を継ぎ、25歳の時、故郷・近江に一人で暮らす母親を大洲に迎えようとしたが、頑なに拒まれてしまう。母への思慕と自身の健康不安もあり、藤樹は藩に辞職を願い出たが、許しがおろさず27歳の時に脱藩の道を選んだ。

厳罰を覚悟していた藤樹は、一旦京都に留まり追っ手を待たすが、結局咎めはなかった。故郷へ戻った後は、私塾「藤樹書院」を開き庶民の教育にあたりながら、万人への愛敬の心を本質とする「孝」の思想の究明に生涯を捧げた。後生の人々は藤樹を「近江聖人」と尊称した。

## 日本陽明学の祖

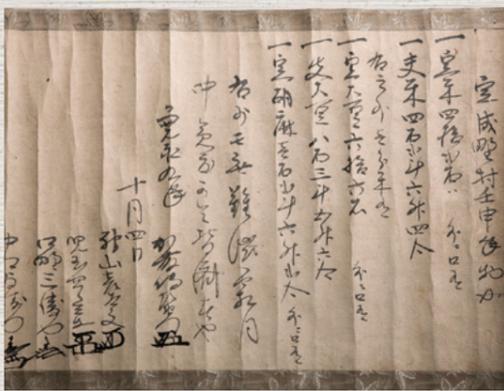
孔子にはじまる儒学の解釈には、朱子学と陽明学がある。世俗の身分秩序を正当化する朱子学は、幕府の教学として受け入れられた。それに対し陽明学は、身分を問わず誰もが生まれながらにして持つ知の働き「良知」を、心を正し発揮していかななくてはならないと説く。藤樹ははじめ朱子学の立場をとったが、深く学ぶにつれ、朱子学の教説に疑問を抱く。そんな彼が帰郷後に

出会った本が「陽明学全集」であり、疑問のすべてを解消することができた。このことから、藤樹は「日本陽明学の祖」と位置づけられているのである。

## 大洲と藤樹

藤樹が大洲で過ごした期間は決して長くはない。だが、大洲藩士は、江戸の行き帰りの際にその学塾に立ち寄り学んでいる。また、大洲における藤樹顕彰の動きは、江戸中期にはじまり現在まで続いていることから、藤樹の影響が今もなお色濃く息づいているのが分かる。

大洲にはゆかりの史跡も数多い。藤樹の暮らした屋敷跡は2カ所あり、少年時代のものが大洲小学校、成人後の屋敷が県立大洲高校の敷地内にある。特に大洲高校の屋敷跡には、当時の井戸「中江の水」、当時の武士の屋敷を模して昭和14年に建設された「至徳堂」などがあり、その遺徳を偲ぶことができる場所だ。



寛永9年(1632)に署名した「定成野村壬申年物成」(大洲市立博物館所蔵)



至徳堂



大洲藩の御用絵師・若宮養徳による中江藤樹像(大洲市立博物館所蔵)



中江の水

## ドラマの ようこそ!

## 舞台へ



## 映画「男はつらいよ」 お殿様公園

肱川のほとりにある「お殿様公園」は、旧大洲藩主の加藤家が大正14年に建てた「旧加藤家住宅主屋(国登録有形文化財)」と「大洲城三之丸南隅櫓」のある歴史公園。昭和52年に公開された映画「男はつらいよ 寅次郎と殿様」では、殿様の屋敷として「旧加藤家住宅主屋」が登場した。旧大名家に相応しい格式高い住まいは必見。